土浦発

未来への伝承 152

「鑿井図」―井戸掘り工程の記録

人々が飲み水を得ようとする時、古くから重要な役割を担ってきたのが井戸です。良質で水量豊かな地下水が得られる井戸掘り技術は、人々を魅了しました。

博物館には、江戸時代の井戸掘り作業を克明に記録した絵巻「鑿井図」が収蔵されています。広げると長さ10mを超える大作です。地鎮祭に始まり、井戸の掘削、あふれ出た井戸水への感謝、井戸の竣工まで、工程ごとに描かれています。いきいきと働く井戸掘り職人たちの姿が、色彩も鮮やかに表現されています。

この絵巻は、沼尻墨僊（1775～1856年）が寛政10年（1798年）に描きました。墨僊は天章堂と呼ぶ塾を中城町（中央一丁目）の不動院境内で営んだことで知られています。絵巻に描かれた井戸も不動院境内に掘られたものでした。

墨僊が描いた井戸は、中城町の共同井戸として掘られたもので、江戸の本所（東京都墨田区）から井戸職人と人足を呼び寄せてつくられました。寛政9年の2月から3月までの2週間にわたる作業の結果、みごとに地下水が井戸からあふれ出し、井戸が完成しました。

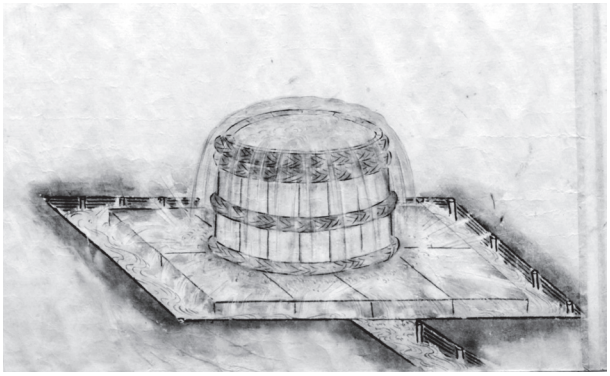
この「鑿井図」に描かれた井戸掘り工法は、江戸で代々井戸掘りを業とした五郎右衛門（生没年不詳）が享保8年（1723年）頃に考案したもので、掘抜井戸と呼ばれます。現在のところ、「鑿井図」は五郎右衛門が考案した井戸掘り工法を示す唯一の絵画資料といわれています。従来の井戸掘り工法に改良を加え、より深い場所にある地下水を得ることができました。掘抜井戸は、地下の圧力によって地上に水が湧き出る特性があり、地上近くの汚水の影響が少ない良質な水が得られます。

興味深いことに、「鑿井図」の巻末には不動院境内の井戸からあふれ出た水の行方についても描かれています。井戸水は、水戸街道の地下に埋められた竹製の樋（水道管）で、天神（中城天満宮・中央一丁目）前に設置された呼び井戸に通水されました。呼び井戸は、送られてきた井戸水を溜め、汲み上げて使用するものでした。

墨僊が「鑿井図」を描いた寛政10年前後は、土浦に掘抜井戸が導入された時期であり、不動院の井戸以外にも掘抜井戸がつくられました。土浦における井戸の転換期に生きた墨僊にとって、江戸の進んだ井戸掘り技術は大いに感銘を受けるものであり、それが井戸掘り工程を示す「鑿井図」を描く原動力となったと思われます。

「鑿井図」は、12月4日(火)から24日(月)まで博物館で展示いたします。どうぞご覧ください。

問市立博物館（☎824・2928）



▲沼尻墨僊「鑿井図」〔井戸の竣工〕（個人所蔵）

▼沼尻墨僊「鑿井図」〔祝賀の準備〕（個人所蔵）